2017 年度点検・評価シート

※下記の指摘事項、課題を踏まえて、Ⅱ点検・評価　Ⅲ【達成目標】欄を記述してください。

（進捗状況を【現状説明】に記述し、必要に応じて新たに【目標】を設定する。）

2016 年度大学評価（認証評価）結果指摘事項 なし
2016 年度外部評価委員会指摘事項 **【特筆すべき事項】** 全学でＧＰＡ制度を導入したことは高く評価でき、特筆に値する。一般論としてＧＰＡ制度導入の目的は「学生の学ぶ意欲の助長」、「学生の目的意識的・計画的な学びの助長」、「学生の成績評価の厳格化」など多様にありうる。そこでＧＰＡ制度の具体的な活用の在り方が問われることになる。法学部の点検・評価シートの「目標達成の指標」欄に、「全学でＧＰＡ制度が導入され、各種の選考等で活用されている」との記述がある。そうだとすると、たとえばＧＰＡのあるポイントを基準点に設定して、進級・卒業の条件、教育実習履修の許可条件、留学の許可条件、奨学金支給ないし継続支給の認定条件など「学生個人の権利ないし利害にかかわる事項の許可・承認の条件」として活用していることがすでにあるのかもしれない。そうした場合、その理論的根拠、正当性、教育指導上の適否等が問われることになるので（説明責任）、十分な検討をお願いしておきたい。 **【改善提言】** シラバスに関しての問題の一つは、学生がシラバスを読み、理解し、活用しているかどうかである。大学の点検・評価シートの「改善すべき事項」欄に、「本学は Web シラバスを導入しポータルサイトで公開しているが、学生のアクセスが十分でない」との記述がみられる。経営学部のシートには、「履修前にシラバスを読んでくる学生はほとんどいない」と記述されている。国際関係学部は「シラバスを読んでくる学生　目標達成の指標：70%」を掲げている。このような取り組みが全学に広がることを期待したい。
前年度からの課題（2016 年度点検・評価シート Ⅳ次年度への課題 より転記） 2017 年度文学部 FD 研究会は、2016 年度同様に「テーマ」を設定して開催する。

Ⅰ　評価項目・担当部局

対象部局	文学部
評価基準４	教育内容・方法・成果
中項目　4-3	教育方法　　【自己評定Ａ】
点検・評価項目(1)	4-3-1 教育方法および学習指導は適切か。
評価の視点	教育目標の達成に向けた授業形態（講義・演習・実験等）の採用
	履修科目登録の上限設定、学習指導の充実
	学生の主体的参加を促す授業方法
点検・評価項目(2)	4-3-2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。
評価の視点	シラバスの作成と内容の充実
	授業内容・方法とシラバスとの整合性
点検・評価項目(3)	4-3-3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。
評価の視点	厳格な成績評価（評価方法・評価基準の明示）
	単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性
	既修得単位認定の適切性
点検・評価項目(4)	4-3-4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。
評価の視点	授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施
	責任主体・組織、権限、手続きを明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させているか。

Ⅱ　点検・評価　対象期間は 2016 年 4 月～2017 年 5 月までとする。（教員数、学生数などのデータの基準日は 2017 年 5 月 1 日）

【点検・評価項目ごとの現状説明】

4-3-1	授業は、講義・演習を中心に、実習・実験・研修（国内・海外）をも組み合わせて行われている(A4-3-1)。文学部は、人文諸科学に関する学識を修め、各学科で学んだそれぞれの専門性を生かして、日本社会・国際社会に対する高い見識をもつ人材を育成することを目的とするため、各学科の教員が様々な授業形態と方法を採用し指導している。 たとえば、日本文学科の「比較文学・文化特殊講義」は講義科目として、グローバルな視点から日本文学を考察するための方法・知識を学び、中国学科の「中国文学特別演習 1・2」「中国哲学特別演習 1・2」「中国史学特別演習 1・2」「中国芸術学特別演習 1・2」は演習科目として設置されており、英米文学科の「英語・文化コミュニケーション演習 1」は国内語学研修、「英語・文化コミュニケーション演習 2」は海外語学研修に振り替える演習科目として、教育学科の「理科 1（地学）」「理科 2（生物）」等は実験科目、「音楽研究 2（管楽器）」「音楽研究 4（声楽）」「美術研究 3（ろくろ）」「美術研究 5（染色）」「舞踏文化研究」「野外教育」等は実習科目として、書道学科の「書道文化演習 1（国内）」「書道文化演習 2（海外）」は研修科目として開講されている。

	2014 年度入学者より適用した卒業要件単位（124 単位）における 1 年間の「履修登録単位数の上限」は、5 学科共通で、1 年次から 3 年次は 44 単位、4 年次は 49 単位を上限としている。ただし教育学科は、卒業単位に諸資格に関する科目を合わせて、各年次で 64 単位を上限とする(A4-3-2 第 23 条の 6 第 2 項、B4-3-55 d2-表 20)。これに加えて、2 年次から 3 年次への「進級要件単位数」を、日本文学科 40 単位、中国学科・英米文学科・書道学科 44 単位と定めている（教育学科は進級要件の定めがない）(A4-3-2 第 23 条の 6 第 4 項)。このように履修登録単位数の上限と進級要件単位の下限を設定することにより、各年次においてきめ細やかな学習指導の充実を図っている。 学生の主体的参加を促す授業は、各学科とも演習（ゼミ）を中心に取り組んでおり、すべての演習担当教員が「ゼミ合宿」を休暇中に実施して、学生の主体的な学習環境を授業外にまで設けている。さらに書道学科では、合同ゼミ研究発表会・批評会も学生主体で運営されている(B4-3-2)。社会とのつながりについては、各学科を基盤とする学会（日本文学会・漢学会・英文学会・教育学会・書道学会）主催のシンポジウムや講演および人文科学研究所主催の研究発表会等に社会人講師を招聘し、大学での学びと社会の現実の場との関わりについて考える機会を提供している。
4-3-1	**以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【　】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。** （1）教育目標の達成に向けた授業形態（講義・演習・実験等）の採用について**【○】** 具体的事例： ［日本文学科］講義と演習をバランスよく配置し、知識・教養の習得とその応用・実践が実現できるよう配慮している。 ［中国文学科］講義科目と演習科目を配置し、知識と実践力を養成して、卒論作成へつなげている。 ［英米文学科］2015 年度より継続している。例えば、アメリカ文学関係でいくと、演習として何種類かの「英米文学演習」を設け、講義だと「アメリカ文化論」等を設置している。イギリス文学関係も同じである。また英米文学科独自のものとして、「英語・文化コミュニケーション演習 1」は国内語学研修、「英語・文化コミュニケーション演習 2」は海外語学研修に振り替える演習科目として設定している。 ［教育学科］これまでの取り組みに継続して講義科目・演習科目・実技科目を配置し、基礎的知識と教養の習得およびその応用・実践が可能となるように配慮している。 （2）履修科目登録の上限設定、学習指導の充実について**【○】** 具体的事例： ［日本文学科］1 年次から 3 年次までの上限は 44 単位、4 年は 49 単位。欠席の多い学生に対しては、基礎演習やゼミの教員に連絡を義務づけている。2015 年度より継続して、成績不良学生に対して指定された教員が面談し、学習面・生活面の指導と支援を行っている。 ［中国文学科］履修できる単位を限り、学習効果が上がるようにしている。TA を配置して学習を支援している。 ［英米文学科］2015 年度より継続して、2014 年度入学者より適用した卒業要件単位（124 単位）における 1 年間の「履修登録単位数の上限」は、1 年次から 3 年次は 44 単位、4 年次は 49 単位を上限としている。これに加えて、2 年次から 3 年次への「進級要件単位数」を 44 単位と定めている。このように履修登録単位数の上限と進級要件単位の下限を設定することにより、各年次においてきめ細やかな学習指導の充実を図っている ［教育学科］年間単位取得が既定数以下の学生に対し、2016 年度からは日常的に会議で問題にし、面接を行なうなど指導を強化している。 （3）学生の主体的参加を促す授業方法について**【○】** 具体的事例： ［日本文学科］演習の授業で、学生自身による問題設定と問題解決を課している。 ［中国文学科］1、2 年次の必修科目はクラスに分け、授業への主体的な参加を促している。専門の演習科目では辞書の携帯を義務づけて主体的な学習を促している。また必修ゼミを少人数で行うことで主体性を引き出している。 ［英米文学科］2015 年度より継続して、学生の主体的参加を促す授業は、演習（ゼミ）を中心に取り組んでおり、すべての演習担当教員が「ゼミ合宿」を休暇中に実施して、学生の主体的な学習環境を授業外にまで設けている。 ［教育学科］1・2 年次には「基礎演習」を必修科目として配置し、そこでは学生主体となる演習形式で行い、運営・課題設定・課題へのアプローチなど学生の主体的な参加を追求している。 ［書道学科］2016 年度より新たに授業の延長として、大東書道学会の中で学生が主体的に参加するプログラムを設けた。
4-3-2	シラバスは、全学統一の書式が作成され、それに従って記入している（A4-3-1、B4-3-19）。成績評価についても教員間のばらつきがないように、基準を明記するようになった。チェック体制を一次（事務室）、二次（各学科教務委員またはカリキュラム委員）とし、基準に沿うように実施している。授業内容・方法とシラバスとの整合性についても、留意している。2016 年度の「学生による授業評価アンケート」の結果では、教員はシラバスを授業に反映していたかの設問に対して、学部平均で 71.0%の学生が肯定的な回答（「非常にそう思う」「そう思う」）をしている（B4-3-55 d2-表 23）。
4-3-2	**以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【　】内に○・×で記入し、○の場**

	合はその内容と結果を記述してください。 （1）シラバスの作成と内容の充実について【○】 具体的事例： ［日本文学科］全学的な方針に従って、各教員がシラバスを作成している。カリキュラム委員が、シラバス・チェックを実施している。 ［中国文学科］シラバスの項目が詳細になり、年間の授業計画が分かりやすくなっている。 ［英米文学科］2015 年度より継続して、シラバスは、全学統一の書式が作成され、それに従って記入している。 ［教育学科］シラバスは全学統一の書式となり、内容も細分化され、充実してきた。 ［書道学科］2014 年度より継続して、シラバスの点検を厳密に行っていることにより、内容も充実してきた。 （2）授業内容・方法とシラバスとの整合性について【○】 具体的事例： ［日本文学科］授業評価アンケートの評価項目の 1 つなので、各教員が整合性に留意している。 ［中国文学科］シラバスに到達目標があり、適正な方法で教育されている。 ［英米文学科］2015 年度より継続して、授業内容・方法とシラバスとの整合性についても、留意している。 ［教育学科］授業評価アンケートの項目なので教員が整合性について留意している。
4-3-3	成績評価と単位認定は、学則に基づき、シラバスに明示した評価の方法・基準等をもとに、適正に行われている（A4-3-1、A4-3-2 第 21 条）。既修得単位の認定も同様である（A4-3-2 第 19 条の 2～4）。
4-3-3	以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【　】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。 （1）厳格な成績評価（評価方法・評価基準の明示）について【○】 具体的事例： ［日本文学科］各教員がシラバスで評価方法・評価基準を明示し、それに従って厳正に評価している。 ［中国文学科］シラバスに評価方法が明記されているので、厳正に評価されている。 ［英米文学科］2015 年度より継続して、学則に基づき、シラバスに明示した評価の方法・基準等をもとに、適正に行われている。 ［教育学科］シラバスに明示した評価方法・基準で厳正に評価している。 （2）単位制度の趣旨に基づく単位認定について【○】 具体的事例： ［日本文学科］厳正に行っている。 ［中国文学科］専門の演習科目では予習が前提になっており、家庭学習も含めて評価されている。また講義科目では課題を提出させることで家庭学習の内容を評価に加えている。2016 年度よりガイダンスで授業に取り組む姿勢として、家庭学習の時間を確保するよう促している。また単位が家庭学習を含めたものであることは履修の手引きで周知されている。 ［英米文学科］2015 年度より継続して、学則に基づき、シラバスに明示した評価の方法・基準等をもとに、適正に行われている。 ［教育学科］シラバスに明示した評価方法・基準で厳正に単位認定されている。 （3）既修得単位認定について【○】 具体的事例： ［日本文学科］厳正に行っている。 ［中国文学科］学科の単位認定にてらし厳正に行われている。 ［英米文学科］2015 年度より継続して、既修得単位の認定は適正に行われている。 ［教育学科］学則に基づき、厳正に既修得単位を認定している。
4-3-4	全学の FD 委員会と並行して、2010 年度より学部独自の FD 委員会を設置した。全学で毎年度実施される「学生による授業評価アンケート」結果を学科選出の FD 委員が分析し、各授業担当教員にフィードバックしている(B4-3-24 p.　～p.　)。教員相互の授業改善の取り組み等の実践交流会（年 1 回）を中心とする、学部独自の FD 研究会を開催し、その記録・資料を報告文として毎年度「文学部・FD 委員会ニュース」を発行し、教育内容・方法を検証し、課題解決に向け取り組んでいる（B4-3-33）。 2016 年度文学部 FD 研究会における各学科からの報告内容は、下記のとおりである。 ・日本文学科・太田 雅孝「想像力を刺激する創造行為」 ・中国学科教員・小塚　由博「OHC を用いた授業－中国文学基礎演習を中心に－」 ・英米文学科教員・日野原　慶「ポップカルチャーを文脈化する－比較文化論演習における試み－」

	・教育学科教員・齋藤　友介「多様化する入学者への対応－発達障害への理解を深めるために－」 ・書道学科教員・髙橋　利郎「書をめぐるしごと」
4-3-4	**以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【　】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。** （1）授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施について**【○】** 具体的事例：新たな取組として、2016 年度文学部 FD 研究会は「テーマ」を３つ設定し、そのどれかに該当する内容を研究発表した。その３つとは、①授業テクニック－映像の効果的活用－、②アクティブラーニングを高めるもの、③想像力を刺激する方法、である。 （2）教育方法の検証に関する責任主体・組織、権限、手続きについて**【○】** 具体的事例：文学部 FD 委員会を年 3 回ほど開催し、「文学部 FD 研究会」における質疑応答とアンケート集計を踏まえた「文学部・FD 委員会ニュース」が発行され、文学部教授会において報告される。また「学生による授業評価アンケート」結果を学科選出の FD 委員が分析し、『学生による授業評価アンケート』大東文化大学授業評価報告書Ⅰ（全学データ）2016 年度に報告される。

【効果が上がっている事項】

4-3-1	
4-3-2	
4-3-3	
4-3-4	

【改善すべき事項】

4-3-1	
4-3-2	
4-3-3	
4-3-4	文学部 FD 研究会の「テーマ」設定を継続して行い、授業改善の提案に努める。

Ⅲ　【達成目標】目標の進捗状況は、「S：完全に達成」　「A：概ね達成」　「B：やや不十分」　「C：不十分」　で、評価する。

達成目標		目標達成の指標となるもの		評価				
				2014	2015	2016	2017	2018
中期目標（2014～2018）	4-3-4「学生による授業評価アンケート」結果を学科選出の FD 委員が分析し、各授業担当教員にフィードバックし、授業改善に努める。	「文学部・FD 委員会ニュース」を発行し、FD 委員会および教授会において、教育内容・方法を検証し、課題解決に向け取り組んでいる状況を記載している。	→			A	A	
16 年度目標	4-3-4「学生による授業評価アンケート」結果を学科選出の FD 委員が分析し、各授業担当教員にフィードバックし、授業改善に努める。	授業評価アンケートの分析結果について、教授会に報告される。				A		
17 年度目標	（対象期間は 2017 年 4 月～2018 年 3 月）4-3-4 文学部 FD 研究会の「テーマ」設定を継続して行い、授業改善の提案に努める。	「文学部・FD 委員会ニュース」を発行し、FD 委員会および教授会において、教育内容・方法を検証し、課題解決に向け取り組んでいる状況を記載している。					A	

Ⅳ　評価専門委員会所見

4-3-4【現状】　学部独自の FD 研究会等の取組は、他学部の模範になるものであり評価できます。

Ⅴ　所見への対応

Ⅵ　次年度への課題

特になし

本項目の根拠資料（データ類、裏付けとなる資料）

A4-3-1　　大東文化大学・大学院シラバス（CD-R） 大東文化大学ホームページ（Web シラバス） http://www.daito.ac.jp/campuslife/syllabus/index.html　≪既出≫A4-2-16

A4-3-2	大東文化大学学則　≪既出≫A1-1
B4-3-2	書道学演習(ゼミ)中間発表会
B4-3-19	2016 年度シラバス（授業計画）の作成依頼について
B4-3-24	学生による授業評価アンケートと大学教育　2015 年度　≪既出≫B3-12
B4-3-33	文学部・FD 委員会ニュース(最新号)
B4-3-45	文学部 FD 研究会資料
B4-3-55	大学データ集　≪既出≫B1-22

〔追加資料〕